



Title	聖ヴィクトールのフーゴーの聖書観
Author(s)	山崎, 忠
Citation	基督教学, 3, 55-58
Issue Date	1968-07-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46226
Type	journal article
File Information	3_55-58.pdf



聖ヴィクトールのフリーゴの聖書観

山 崎 忠

アウグスティヌス以来の伝統的思弁の方法が終始受けつがれてきたにもかかわらずきわめて実り少なかったと云われるスコラ学も、十二世紀になると確かにアンセルムスにも見られなかった所謂学としての聖書自体に対する関心が芽生えてきた事実は否定することができない。

アンセルムスにも聖ベルナルドスにも聖書の中に告知された神学問題に対する意識は十分に認められるが、それらはどこまでも内容への主題的関心であつて各々アウグスティヌス歴史神学の聯関内における護教的意図からのものであつた。フリーゴも同じくアウグスティヌス歴史神学の視点に拠りながらも独立した学としての聖書研究の方法論への接近をめざす。このような態度は十三世紀への準備期としての当時代に現われないわば一種の聖書主義とも云うべきものの浮彫であつて特にドイツのスコラ学において顕著であつたと Seeberg は指摘している。この点では Tardif もこの過渡的時代の中で占めるフリーゴの役割はアベラルド以上に評価されねばならないものであると云う。

聖書研究書 *De scripturis et scriptoribus sacris* は神学研究の入門書であつて、一時期を画したあの学の体系的分類の中では第一入門段階たる他の諸学に次いで最高学としての神学への理解に奉仕する第二入門学とされる。しかしこの位置は實際適用の面では別であつて、必らずしも事実上の段階的準備学となつてゐるのではなくむしろ多分に気分的なそれにかすぎないようである。このことは後世諸大学の整備とともに R・ベーコンが採用するようになった物理学、幾何学、地理、年代史等々にもこの時すでに一種の予備学問としての性格を与えていながらその實際が必ら

ずしも伴っていたとは思われないのと事情が等しい。これらの諸学を扱った書物については著者真正性の問題すらも今日なお未確定のまま残っているものもある。Southern の考えるように、真相はアンセルムスにも見られた所謂方法論におけるいわば定型的姿勢から由来することであつたとしなければならぬであらう。

フーゴーは他の箇所と同様本書においても自然と超自然との間に決定的な断絶を設け、知の確實性の起源をこの両者の差違に求める。アリストテレス倫理学をはじめ諸学は哲学知と呼ばれて自然を対象とする。自然は神の聖なる創造の業 *opus conditionis* で本来それ自体の完全性を有するものでありながら、墮罪が後行したことによつて哲学知は自からでは不完全を免れない。聖書の学はその中に神のみ言葉の受肉が告知された聖書そのものに関わるることによつて神知の直観に至る魂の正しい順路に直結する。神のみが完全なる真理、したがつて誤謬のない知であるからである。しかし確實性の断絶にもかかわらず知識の構成において哲学と聖書学とがきわめて統一的なものであることを誰よりも強力に彼は主張して原理上その連続性には一点の疑念をもさしはさむことはしない。

受肉の出来事は神の人間回復の業 *opus restaurationis* である。この業は同じく超自然の諸サクラメントを伴つて救済史的時秩序の中心をなすことにより全人類の救済を目的とする聖書固有の内容をなす。したがつてフーゴーにとつてはたとえば歴史の中でのキリスト以前と以後の信仰者たちの間には救済可能性の有無優劣は問題とならないし、教派問題もそのサクラメントに対する見解の相違にもかかわらず全く留意する必要のない事柄ですまされる。彼等は聖書に対して同じ信仰者であるという点で全て同じ王の旗の下に闘う兵士たちだからである。

この聖書内容の確知とそれに基づいた正しい生の在り方への準備がフーゴーにとつても聖書朗読の実際目的であるが、そのためには諸学の助けは不可欠である。その例証は意味の確定と解釈に際して文法的操作への配慮を無視することが許されないと云う時に端的に示されよう。ここではアウグスティヌスの解釈学の精神にしたがつて彼もまた字義と靈義の慎重な取り扱いを読者に要求する。特に長大な一章は当時横行した過度の秘義解釈者たちへの論難に当て

られる。その語気は鋭く向う姿勢ははなだ不寛容である。文字のもつ公理や規則すらも無視すると彼等を非難するフーゴーの立場は、近年解釈学史の労作の中で Smalley 等が認めるようになった明らかな彼の字義主義のそれである。

しかし彼が靈義のもつ意味の重要性を全く認めていなかったというのではない。むしろ十分に詳細な説明を加えることによってこの解決が隠れたる神の真意を文字の下に理解するに必要な読み方であることを明らかにした後で、そのための必要がある場合は必ず象徴化の客観的規定に則らねばならないと教えて具象的事物、人物、数、場所、時および出来事の六規定を設定する。これらの操作を経た象徴的解釈を彼は秘義とは全く別種の神の真意を知解しうる聖奠的解釈 *Sacramentum* と称して重視するが、Ratzinger はボナベントウラも後に三様の靈的知解の他にフーゴーのこの意味の次元を同時に考えるようになったことを認めている。しかしこれらを考慮したうえで実施したというフーゴー自身の具体的な解釈例の多くは、数に対する古代諸教父たちとの神秘的觀念の共有等にみられるとおり事実上ふたたび古典的な秘義解釈に立ち帰っていると思われぬものとなり、字義の立場の徹底性をいちじるしく損ってしまう結果となった。

本書の後半以下は正典の構成やその成立事情について語ってきわめて意欲的な探究心を覗わせる部分ではあるが、多くの労力を費したにもかかわらずピアス以来受けつがれてきたヒエロニムスやアウグスティヌス等にそのまま依拠して以上に出ることなく、今日的にはもちろん非常に不完全な知識に止まったままで満足しなければならなかったのはその時代性からして当然許されねばならないであろう。しかし新約書簡集以下をフーゴーがこの時までまだ靈感を受けていなかったものとみていたとする Hugonin は明らかにここでのテキストの読みちがいを犯していると云わなければならない。

多くの面にみられるフーゴーの不完全性は、彼においてもまた聖書の章句を豊富に駆使することを好んだ結果往々

にして自身の言葉と聖書の引用とが不分明になってしまった場合にもみられる如く、フーゴーに止まらず何れも結局は原則と実際との間の不連続から由来するスコラの共通性であろう。しかし彼の原則への接近はきわめて自覚的であつて、後にボナベントウラにも引きつがれて更に伝統的思弁のひとつの流れを形成していくことになるようである。